

## 特集・宮崎汎会員が見た世界の旅第1部映画編第23話

### 映画「哀愁」の取り持つ縁 イギリス

初めて憧れの地ヨーロッパを訪れた時のことである。欧州資本市場調査団が編成され、住友電工川上哲郎常務（後社長・会長を歴任）団長の下、総勢18名が参加しその幹事役をひきうけた。

ロンドンに到着し興奮冷めやらぬまま第一夜が明けた。バスでホテルを出発した。ビックベンを横目で眺めながら、これが大英帝国の国会議事堂かと目を凝らしていると横に座った川上団長が「君は若いが哀愁と言う映画は見たことはないだろうね」と話しかけてきた。「あの映画の場面はこのすぐ先の橋から始まるんだ……」。間もなくテムズ川にかかる橋に差しかかった。だが目を凝らしても何の変哲もない橋である。

渡り終えると川上さんは大きなため息をつきながら「あの橋はウォータールー橋と言うんだ。大戦中の悲恋物語りの舞台でね、映画は何度か繰り返しかえし見たけどその都度涙が出たね。私はロンドンに来るといつもこの橋を渡ることになっているんだ。哀愁のヴィヴィアン・リーはきれいだったなあ、映画を思い出すと私の青春時代が蘇るようでね。」と言って目をつぶった。



イギリス国会議事堂 ビックベン



ロンドン市内を流れるテムズ川

映画のあらすじは、白鳥の湖の曲が流れる中、大尉が車を降りてビリケン人形を手に取りウォータールー橋を歩く。そして自分が大尉であった若き日をせつなく追憶するところから始まる。

第一次大戦下ロンドンに空襲警報が鳴り響く。ウォータールー橋でロバート・テイラー演じる大尉がバレリーナの一団と出会う。その中にいたヴィヴィアン・リー扮する一人が慌ててバックの中身をぶちまけてしまい、大尉と一緒に拾い集めた中に小さな白いビリケン人形があった。

これは彼女の幸運を呼ぶお守りであるという。二人は地下鉄の駅構内に急ぎ避難し、互いに好意を抱きあう。彼女は今夜のバレエ公演のために、大尉は上役とのディナーの約束があり二人は別れる。彼女は明日戦地に向かう大尉に幸運のビリケン人形を手渡す。

バレエの演目は白鳥の湖である。公演が始まり満席の中、大尉が上役との約束を反故にして駆け付ける。舞台上で踊っていた彼女が目ざとく見つけ目を見張る。

幕が下り年配の女性であるが鬼のようなバレエ監督から嫌がらせを受けながら大尉の待つキャンドルライトというレストランに駆け付ける。二人は別れの曲に乗ってダンスを踊りそして互いに愛しく魅かれ合う。

翌日ガラス窓越しに雨降る外を何気なく見た時、雨の中にたたずむ大尉を見つけ驚き飛び出す。大

尉は出発が2日延びたと告げ、彼女に結婚を申し込み彼女はちょっと戸惑いつつも受け入れる。軍人は結婚するにも上官の許可を得る手続きが必要でそれに手間取り、教会に駆け込むが今夜は規則でできないと告げられ仕方なく明朝11時に予約し二人だけの結婚式を挙げることにした。バレーの仲間たちに祝福されている宿舎に、大尉から電話があり急に出発が早まったことを告げられ、あわてて駅に向かうも列車が発車したところへ駆けつけ別れを惜しむ暇もなく列車は遠ざかっていく。バレーの公演をすっぽかしたので鬼監督から首を言い渡される。親友が監督に猛烈に抗議したが結局2人とも首になる。



映画哀愁のDVD

収入のない身となった二人は宿代も食事する金もなく思案する。戦地の大尉からは手紙や贈り物が届く、ある時スコットランドにいる大尉の母親が会いたいといってレストランで待ち合わせする。列車が遅れてなかなか現れない間、サービスで渡された新聞を何気なく広げると紙面の死亡欄に大尉の名があるではないか。蒼白となり必死にこらえる。そこへ大尉の母が到着する。彼女は母親にこのことを告げてはならないと懸命に隠す。会話はちぐはぐとなり母親は不快感に去っていく。緊張で彼女は倒れこむ。同宿の親友は身を売るまでして二人の生活を支えるが、遂に彼女も身を売るまで追い詰められ、酒場や通りで客引きをする。駅の雑踏で客を物色していると復員兵が次々通り過ぎていく、その中に戦死したと報じられた

彼の大尉がいるのではなか。大尉は目ざとく愛する彼女の姿を見つけ駆け寄る。彼女も戸惑いながら駆け寄る。大尉の愛に溢れた説得を受け入れ二人は大尉の母の待つ故郷スコットランドへ向かう。大尉の家系は貴族で広大な敷地を馬車に揺られそして暖かく迎え入れられる。彼女は過去を語らずお披露目の席でも明るくふるまうもこれでいいのかとふっと顔が曇る。悩み抜いた末その夜母親の部屋を訪ね大尉には話さないでくれと懇願し自分の忌まわしい過去を話す。そして身を引くべく館からロンドンへとって返す。大尉は後を追いつ彼女の親友に行き先を尋ねる。親友はかつて一緒に客引きをした場所を訪ね歩くも誰も知らないと答える。一方大尉のもとを逃げるように去った彼女は二人が初めて出会ったウォーターloo橋をさ迷っていた。激しい車の車列をうつろな目で眺めながら車の前に身を投げ自らの命を絶つ。大勢の人が事故現場に駆け付けそこに幸運を呼ぶビリケン人形が落ちていた。

何ともやるせない映画である。この映画を見終えた時気が付くといつも涙が滲んでいた。

そしてロンドンで川上さんが多感な青春時代に見た映画“哀愁”にまつわるエピソードを問わず語りに話してくれた情景が記憶の底から浮かび上がり胸が締め付けられるのである。

川上さんには帰国後も困りごとがあると相談に乗っていただき、時には美味しいものをご馳走になった。映画哀愁が取り持ってくれた縁である。